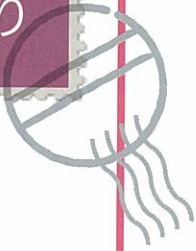


修了生
からのお便り



同和教育について思うこと

「五万日の日延べだ」といわれた日を昨年の九月三日に迎えました。一八七一年に出された解放令で部落差別はなくなっていないければならなかったのですが、五万日経ったいまもなお厳然として差別は残っています。この現実を直視した同和教育の充実と推進が求められていることは、周知の事実です。

私が四月から勤務する学校は、人権教育・同和教育とキャリア教育を学校経営の二本柱に据えています。私の校長としての課題は、学区に同和地区があることを踏まえ、人権教育・同和教育を職員の先頭になって充実させていくことにあります。

しかしながら、私の恥ずべきことは、教諭時代に同和教育の授業実践の経験がないことにあります。そのような私がやるべきこと、それは、自分自身の同和問題、同和教育に対する識見を深めること、同和教育担当者を中心とした学校ぐるみの同和教育の推進です。

最近の研修会で、新しい小学校の社会科の教科書から「土農工商」という言葉が消えたこと、歴史研究の進展により中世の差別され

た人々の存在が明らかになってきていることを学びました。人としての生き方の視点から部落史学習の重要性を感じ、研修をより一層深めていかねばならないと決意した次第です。

ところで、二〇〇八年度に行われた本県教職員の人権教育・同和教育に関する意識調査によると、罪人起源説を否定し切れていない教員がまだいることが明らかになっていきます。このような実態を受け、上越教育大学には教員養成大学であることを踏まえ次のことを期待したいと思います。

それは、人権感覚を磨く上で部落差別の歴史や現実から学ぶ場が必須であること、そして、大学教育が学生の誤った認識を正す最後の場であることから、同和教育の講座の内容を充実させていきたいということです。

上越地域は県内の同和教育をリードしています。この同和教育においても大学と地元との学校現場との連携強化が双方に求められているのではないかと感じています。



いのち・愛・人権展
一人一人が人権問題について学び、協力して差別をなくしていくための知識と行動力を身に付けていくことを目指し、1989年から新潟県内の各地で年一回開催しているもの。今年度は、上越市を会場に開催され、約6,000人が来場している。写真は、狭山事件のパネルに見入っている学区の小学生の姿。



竹田 幸雄
(たけだ ゆきお)

上越市出身。昭和63年上越教育大学大学院教科・領域教育専攻 自然系(数学)コース修了。新潟県内の公立小・中学校、上越教育大学附属中学校、新潟県教育委員会等を歴任し、本年度から上越市立城北中学校に勤務。57歳。



交流会活動

学区にある同和地区の会館で開催された餅つき大会。地区内外の人々が集まった交流会のひとつ。このような交流会は、年二回開催されていて、春にはバーベキュー大会が開催されている。